

彼是一萬人計モ流死也。明應七年戊午八月廿二日ノ事也

〔後法興院記〕明應七年八月廿五日己丑辰時大地震去六月十一日地震一倍事也。九月二十五日傳聞去月大地震之日伊勢參河駿河伊豆大浪打寄海邊二三十町之民屋悉溺水數千人沒命其外牛馬類不知其數云々前代未聞事也。

〔異本年代記拔萃〕明應七年八月廿五日辰刻大地震其程良久從其相續日々地搖此時伊勢國大湊悉滅却其外三川紀伊諸國之浦津高鹽充滿而滅亡云々。

〔宗長手記〕大永二年略中伊勢大湊へわたり山田につき侍り則參宮す略中雲津川阿野の津のあなに當國牟楯の堺にて里のかよひも絶たるやうなり略中此津十餘年以來荒野となりて四五千軒の家堂塔跡のみ淺茅蓬が杣誠に鶏犬はみえず鳴鴉だに稀なり。

〔伊勢紀行〕あの、つ近く成て、そこともわかぬ遠山霞の隙々よりみゆ、

いせの海の浦にはしほや満ぬらん霞引たるあの、遠山

〔玄與日記〕慶長二年二月十四日伊勢へ參宮申略中十五日鈴鹿山を越てあの、津に著ぬ略中十七日阿の、津へ歸り侍りぬ、

駿河國 益津

〔日本書紀景行七〕四十年是歲日本武尊初至駿河其處賊陽從之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂林臨而應狩日本武尊信其言入野中而覓獸賊有殺王之情略註放火燒其野王知被欺則以燧出火之向燒而得免略註王曰殆被欺則悉焚其賊衆而滅之故號其處曰燒津、

〔日本書紀通證景行十二〕燒津今云燒野神名式駿河國益頭郡燒津社風土記曰所祭市杵島比咩也、  
萬之、  
都也、

〔倭名類聚抄六〕駿河國益頭郡益頭萬之都

〔古事記中〕爾天皇亦頻詔倭建命言向和平東方十二道之荒夫琉神及摩都樓波奴人等略中故爾